

ONE LOVE 通信 64号

2018年12月16日発行

今年は何度か洪水に見舞われ、その修復に多くの時間をとられた年だった。ワンラブ通信も、その慌ただしさのため、今年は1回書けなかった。精神的につらかったなあ。やられるたびに、今度こそは大丈夫と思って修理をするけど、自然の力には勝てないのです。そしてこれからこの戦いも続いていくのかという不安...

しかし良いこともありました。どこかで誰かが見ていてくれるというありがたき日々。今年も皆さま、どうもありがとうございました。2019年も突っ走って(年齢のせいか、多少スピードは落ちるかもしれませんが)がんばりま〜す!



【雨に負けるか!】

洪水の被害に遭ったことは前号のご報告の通りです。雨の音を聞くとたびにトラウマ状態になっています。

次の雨季が来る前に、できる限りの修理を施し、さらに再び被害に遭わないために補強したりを繰り返した2018年。今もその戦いは続いております。

97年ルワンダ政府からワンラブブランドをもらった時、あまりの広さに愕然としました。草ぼうぼうだし、水はけは悪いし、どこから手をつけて良いのかと、途方に暮れました。でももらっちゃった手前、何とかしなくちゃいけない。予算がほとんどなかったんで、では、草むしりから。しかしそこでは近所の人が、空いている土地だからと豆やらバナナやらを植えており、それを引っっこ抜いたという理由で裁判沙汰にもなった。勝手に許可なく作った農作物であるからして、私たちに落ち度はないのだけど、これからの近所づきあいもある。協議の結果それらの人たちに何がしかの支払いをすることで落ち着いた。その後そこでレンガを作りながら、如何に水捌けをするかということに頭を

悩ませる。しかもきちんとエンジニアを雇うだけの予算がないから、学はないけどたたき上げで技術を学んだという職人を引っ張ってきて、広大な土地を前に腕組みをする。

とにかく少し掘ると水が染み出てきてしまうのです。足もズボット入って抜けなくなっちゃうのです。そう、ここは他のところより位置が低く、すべての水がここに集まるような地形だったのです。土地をぐるっと囲むように排水溝を作ったり、どうにも水が染み出てきて仕方ないから、いっそのこと池にしちゃったり(ついでにここに魚を放流し、その魚を食した)、とにかくありとあらゆることを試みました。

ワンラブブランドが今の形になったのは何年のことだろう? 忘れてしまった。が、とにかく言えることは、今でもワンラブブランドは進化しているということだ。つまりいつも何らかの手直しをしている。そしてそれは手直しをしたいからという理由ではなく、手直しをしなくちゃいけない状況が常にあるということなのだ。

今回は洪水。ワンラブブランドの中を流れている川が、い



つも悪さをする。いや、この場合川は悪くない。悪いのは地球の気候を狂わせてしまった人間にある。とにかく雨の量が増え、前後を考えず施してしまった都市計画のため、雨水の逃げどころが曖昧になり、私たちだけではなく多くの人が被害を被っているのである。

さて修理として行ったのはこんなこと。まず水のかき出し。今回の被害はレストランとゲストハウス、オフィスそして自宅。義肢製作所が何ともなかったのが不幸中の幸いである。が、それ以外はどこもかしこも泥水が流れ込んだ。過去の経験を活かし、多くのものは下に直に置かず、なるべく上に置くようにしたので、物の被害は最小限で済んだ。人は痛手から学ぶことも多いのである。けどやっぱり流れ込んだ水。レストランに至っては、膝くらいまで水が溜まってしまった。最初はポリタンクやバケツを使って、人力でかき出していたけど、何度汲みだしても、ちっとも水が減らないのですね。そりゃそうでしょ、だってプールみたいな状態になっているのですよ。だからついに買いました。ポンプを。そしたらまあ、人力でやれば3日くらいかかりそうな水のかき出しが、3時間ほどで終わりました。ありがとう、文明の利器よ！問題は下に溜まった泥。これ、結構危ないです。滑ります。特にバランス感覚の少ない日本人（私）、滑って転んでケガをしたら余計足手まといになるので、横から口だけ出していました。

レストランやゲストハウスの中を消毒し、ペンキを塗り直し、ここは何とか元に戻りました。



ひたすら黙々と水をかき出していたが、ついに断念し、ポンプを買って汲み上げた。が、最後の仕上げはやはり人力なのだ。壁の色が変わっているところまで水がさがりました…。

そして庭。ここが川が氾濫すると湖状態になってしまうので、やけくそで「ワンラブ湖」と呼ぶことにしました。しかしそのままにしておくわけにはいかないので、50センチ近く土を盛りました。幸い、今、ワンラブブランドの道を挟んで向かい側は大学を作るということで、工事の車がいつも出入りしている。そこで掘り返した土をどこかに捨てに行くらしいのだが、それをうちでもらっちゃう。トラックの運転手もわざわざ遠くまで捨てに行くより手っ取り早いし、うちも普通に土を買うよりずっと安い値段で手に入られるので、一石二鳥なのである。その土をトラック25台分くらい買っただろうか。水が溜まるところにひたすら土を盛った。袋に土を積み、頭に載せて運び、土を撒くという単純作業なのだ。

そういう作業は近所のおじさん、おばさんたちに総動員してもらう。一日300円くらいの日当だが、彼らにとっては貴重な現金収入なのである。噂を聞いて駆け付けたおじさん、おばさんが朝早くから門の前に勢ぞろいし、その中から力のありそうな人たちを選ぶのである。中にはお腹

の大きいお母さんもいたりして、今にも産気づいてしまうのではないかと、こっちがハラハラするが、彼らはたくましいのだ。朝も早くから暗くなるまで、時には歌を歌いながら働いている彼らには、絶対勝てない。彼らの筋肉は、そこら辺のトレーニングジムに通って作られたような、人工的な筋肉ではなく、正真正銘生きるために作られた筋肉なのである。

とにかくまあ、そんなふうについて土を盛ったり、壁を作り直したり、いろんなことをしているから、ワンラブブランドはつぎはぎだらけなのです。見た目は良くないけど、まさしくここにはルワンダ人の血と汗と涙が混ざり合って、今の形になっているのです。

問題は川関係。年々川の深さは増し、河岸はえぐられるのです。河岸に積んだ土嚢は、大量の雨のたびに破れ、結局流されてしまうのです。いちごっこが繰り返されているのだけど、これを本格的に直そうと思うと、川の長さから計算して、数百万円かかってしまうほどなのですね…。さすがにこの予算はないよ。だから今回もまたいつもの土嚢作戦。小麦粉やらお米やらが入っていた袋を買ってきて（50キロ入用の大きい袋）、そこに土を積み、ひたすら河岸に積み上げる。その土嚢に木を打ち込んで流されないようにした。これで何とかかなるだろうと期待を込めて…。

…けど、大雨がまた降り、また土嚢が崩れ流された…。という結果で、この戦いは相変わらず続いているのである。この川は、穏やかな時はせせらいでいて、そのすぐ脇で寝ている者の気持ちを落ち着かせてくれるし、様々な鳥たちが魚を求めて狩りをしたりして楽しませてくれるのだが、いかんせん猛威を振るうときもあって、何とかもう少し穏やかに流れてほしいと思うのである。どうもこの川を眺めていると、自分の性格を見ているようで、何とも居心地が悪くなる時もあるのです。

そして橋。これがないとワンラブブランドに入れない。これも橋げたのあたりがえぐられ、橋が落ちちゃうのも時間の問題なのだ。しかし本格的に橋を作るにはかなりの予算が必要となるわけで、そんな資金はない。



頑強な男どもが丸太を運ぶ。こんな被害に度と嫌だが、こういう力強い男たちを目の当たりに見るのも悪くない。

そこでガテラがひらめいたのは、ワンラブブランドに20年前植えて、立派に育った木を使おうという作戦。太いものは40センチ以上あるし、長さも20メートルくらいあるのだろうか？鉄筋を買って修理するしかない、嗚呼、予算繰りが厳しいと思っていた私は、この素晴らしいアイディアに、思わずガテラに惚れ直したということも付け加えておく。

その日は肉体派の男性たちが勢ぞろい。筋肉隆々な男た

ちが何人もかかってその木を運ぶのだが、まあ大変な作業でした。重たくて動かないのです。掛け声をかけ合いながら（日本的に言えば「せーの、よいこらしょ」みたいな）腹に力を入れるのだが、見ているこっちも掛け声がかかるたびに、下っ腹に力が入るのである。

そんな木を7～8本も使っただろうか。元々あった橋の上に渡し、何とも頑強な橋が出来上がったのである。車が一台通ってもビクともしないのだ。ふふふ、この勝負はこっちの勝ちだ。

感慨深かったのは、私たちは自分たちが育てた木に助けられたということである。その昔、ワンラブランドでレンガを作っている頃、ガテラが鉛筆の太さくらいの苗木を買ってきた。まだ建物も何も作り始めていない頃である。その頃、私はこの場所に建物を建てるための費用を一体どうしたら良いのだ？と苦悩していた時だった。そんな時にガテラは苗木を買ってきたのである。それを見て怒ったね、私は。「なんでこんなもの買ってくるんだ！それより建物を建てるための建築資材を買うのが先ではないか！」と。

私の怒りを横目に、彼はちょっと寂しそうな顔をし、びっこを引きながら、一心不乱にその苗木を植えていた。

そして今、私たちはその大きく育った木に助けられたのである。そのことに気づき、みんなが一生懸命木を運んでいる姿を見て、思わず涙を流してしまった。そしてあの時ガテラを責めた自分を恥じた。ガテラの目はもしかしたら何十年も先のことを見つめていたのかもしれない。今、その橋を通るたびに、その頑丈さに感謝をしている次第である。

そんなふういろいろなことを考えながらの洪水修理工事であるが、この場所をルワンダ政府からもらったこと

はとてもありがたかった。町からも近いので来やすく、また非常に広いので目立ち、ルワンダの人たちからも良く知られるところとなっている。が、金食い虫であることも事実で、果たしてここに費やした費用はいくらになるのか、考えたくない。

この先、雨が降ってどんな状態になるのか、非常に怖いのであるが、ここにいる以上戦っていかなくては行けないのだ。またワンラブの木に助けられることもあるだろう。それまでしっかり育ち続けておくれよ。

【ありがとう、今度は読売国際協力賞を受賞したよ。】

去年から今年にかけて、ありがたいことですね。4つも賞をいただきました。これも皆さまからのご協力があったからこそだと、これからますます気持ちを引き締め、がんばりたいと思います。

今回いただいたのは94年に読売新聞創刊120周年を記念して創設された「読売国際協力賞」です。国際社会への貢献と協力の重要性を身をもって示した個人、あるいは団体、企業を顕彰しているそうです。第一回目の受賞者は国連難民高等弁務官（当時）の緒方貞子さんという、何とも素晴らしい名誉の賞です。

実は今回が3度目の挑戦でした。この賞の存在を知ってから、毎年書類を書いては送っていたのですが、ついにその賞をいただくことができました。過去2回とも最終選考まで残ったそうなのですが、最後のところで落ちちゃっていたのです。だから今回悩みました。出そうか、出すまいか？私、いつもいろんなことを考える時に、相対する諺が頭の中をぐるぐる回るのでね。

例えば「立つ鳥跡を濁さず」と「あとは野となれ山とな



ルワンダ事務所代表ガテラより

【アフリカは本当に性におおらかなのか？】

もうずっと前のことだ。94年の虐殺前のことになる。俺は友だちを頼ってドイツに行った。その頃アフリカの彫刻やお面を売ることが仕事としており、ドイツでそれらを売ろうと思ったのだ。

担いでいったそれらの品物は思った以上に売れ、まとまった金も手に入った。

ひと段落着き、友人が観光に行こうと誘ってくれた。連れて行ってくれたところは砂浜。泳ぐには少し早い季節だが、たくさんの人が見える。

ん？？なんか変だぞ。老若男女がいるが、みんな素っ裸なのだ。そう、そこはヌーディストビーチであった。

俺は目のやり場に困ったね。でもそこにいる人たちは何も気にせず、それぞれの時間を過ごしているのだ。

聞くとところによると、世の中にはこうしたヌーディストビーチがあちこちにあると言うではないか。

これ、おかしくありません？人には羞恥心というものがあり、アダムとイブが誕生してから、人は大切な部分を隠すようになったのではないのですか？

しかしこの人たちはすっぽんぽんなのだ。白人だけではなく、肌の黒い俺の同胞も混じっている。犬だって裸だ。

世間の人はアフリカの性はおおらかだと言うが、人前で裸になることなど、ないのである。隠すところはもちろん隠すし、秘め事はあくまでも秘め事だ。だから基本、ルワンダにはポルノはない。裸の載っている雑誌など、どこにも売っていない。それが当たり前だと思っていた。

しかし西洋の皆さんよ、君たちの性は乱れ切っているね。それが君たちの自由というものなのか？俺には理解不可能だ。人の前で裸になるような、はしたないモラルは持ち合わせていない。そんな自由は俺にはいらない。

そんなお前たちが、なぜアフリカの性はおおらかだなどと言うのだ？勝手にアフリカの性を定義づけないでくれ。俺は性に関しては、アフリカは非常に保守的だと思っている。多分そこで見た俺の同胞たちは、裸になることが西洋の精神に近づく一つの手段と勘違いし、そんなバカなことをしてしまったのであろうと思いたいのである。

そんなふう考え、西洋の性は乱れに乱れ、あることないこと取り混ぜており、だとするとポルノ雑誌のないアフリカはまったくもって性に健全であると、ここに宣言するのである。

れ」。どこかホテルに泊まった時、これが出てきます。チェックアウトする時に、使ったベッドをそのままの状態にして出ていくか、あるいはそれなりにきちんと整えて出るか？

それから私は見栄っ張りなので、こんなのも出てくる。「腹が減っては戦ができぬ」と「武士は食わねど高楊枝」。両方納得するのです。そりゃ、お腹すいたら何もできないわな、という気持ちと、でも見栄を突っ張らせて、そんな素振りを見せたくないと思う自分と。ガテラも両方の精神は持っています。でもお腹がすくと「車だってガソリンを入れなければ動かないのだ」と言って、人にご飯を作らせようとします。

今回の賞に対しては「2度あることは3度ある」と「3度目の正直」です。2度出してもダメだったから今回は諦めようと思いつつ、いや、でももしかしたら…とよこしみたいな気持ちが出てきて、結局書類を書いたのです。



帝国ホテルに飾られたきれいな花の前で一枚。そしてこの日はここにお部屋を取ってもらったのです。一生に一度の帝国ホテルということになるんだろうなあ。

そしたら受賞したのです！いや〜、人生やっぱりやめちゃうよりは、やった方がすっきりするな〜と思ったのです。

実は過去、米百俵賞という賞をいただいたことがあります(07年)。新潟県長岡市の米百俵財団が出している賞で、父親が生前、娘のためにと書類を出してくれました。何度も何度も書類で落ちて、何度目の挑戦だったのかなあ？父親の粘り勝ちで、この賞をいただくことができたのです。審査をした人たち、もしかしたら「またこの人たち、書類送ってきたよ。」と思っていたかもしれません。私の父は穏やかな人でした。でも「挑戦者」の顔も持っていたのです。めげない。寒い日も暑い日も、自転車をこいで、ワンラブ通信を近所に配りまくってくれました。そしてルワンダで生活を始めた私が、もしかしたら桜がきれいだなあくらいのことを、父親に言ったのかもしれません。

その言葉を聞いた父は、ルワンダに桜を植える！ということに挑み始めました。日本の桜を扱っている団体の人に話を聞いたり、駐日ルワンダ大使館にルワンダに桜を持っていっても大丈夫かと聞いたり、あとでそのことを知ってびっくりしました。気候も土壌も違うルワンダ、結論として父親はその夢をかなえることができなかったけれど、ふと考えてみると、私はやっぱり父親の血を引いているような気がします。ダメであっても、とりあえずやってみる。あの穏やかな父親にそんな情熱があったとは気が付かず、今になって同じようなことをしている自分がいると思うのです。

だから今回の読売国際協力賞も諦めないでよかった。結果発表の1週間ほど前、新聞社からメールがありまし

た。最終選考に残っているので、もし選ばれた場合は電話で連絡をします、と。審査が終わるのは日本時間で11時ころ。こっちは朝の4時ころになる。枕元に携帯を置き、まどろみつつも電話を待ちました。

そしたら鳴ったよ！携帯電話が！私の着信メロディはサザンのHotel Pacific。これが鳴り響いたのです。一気にテンションが上がったのです。嬉しかったよ〜。3度目の正直。うっしょ〜！やるだけやって、ダメだったら諦めもつく。今回の賞はそんなことを考えさせてくれたのです。

皆さま、本当にありがとうございました！この賞は縁の下の力持ちをずっと続けてくれた皆さまが受け取った賞です。だから今日は一緒にお祝いをしましょう！



今号の患者さん

覚えていますか？ワンラブ通信60号(17年4月発行)に登場した子供の患者さん。名前はメルシィ(フランス語で“ありがとう”)君。

彼がおっきくなっちゃったのです。去年作った義足が、もう履けなくなってしまいました。

一年半ぶりに会うメルシィ君、おっさんになっていました。あの時は子供っぽかったのに、今は年齢は子供ですけどすっかりおっさん顔です。しかも以前にも増してぶっきらぼうになっています。この間は緊張しているから愛想がないと思ったけど、今は反抗期というやつでしょうか。

まあ、愛想のないことよ。何を話しかけても、聞こえないくらいの声でボソッと話すだけ。あんたねえ、私も愛想悪いけど、あんたはそれを上回っているよ。どこの国でも10代半ばの若者というのはこんな具合なのですね。私も確かにその年代の時は親父とろくに会話をしなかった。すまぬ、親父よ。



ズボンを履いちゃったからわかりづらいかもしれないけど、真ん中がメルシィ君。義足も仕上がりが、やっとなんて笑ってくれました。

今回は2本目の義足となります。履いていた義足は、背が伸びた分短くなり、歩き姿がびよびよことぎこちないのである。

彼は隣のコンゴから来ている。彼の村は反政府軍に襲われ、親を殺され、彼自身は足を失いました。ちょうどやんちゃ盛りのころに足を失った彼は、一体何を思っていたのでしょうか。そして傷が癒え、ワンラブに義足を作りに来たのが去年のこと。

どんなふうに義足を作るのか、もう彼は知っています。だから去年ほど緊張はしていません。型取りを済ませて、出来上がるのは約1週間後。

そして完成した義足を渡す日。相変わらずぶすっとした顔でやってきました。頼むから、ちょっとくらい笑ってくれよと思うけど、笑ってくれないんだなあ。

でもね、新しい義足を履いて、また1歩2歩と歩いてみると、笑ってくれたんだなあ。この瞬間はいつも良かったと思いますね。自分たちのやっていることが無駄になっていないと実感する時です。

それにしても本当に大きくなった。声もすっかり大人の声だし、体つきも筋肉がついてきて男っぽくなってきた。「その後、サッカーはやっている？」と聞いたら、やっぱりボソッと「やってる」と答えてくれた。でも今は、それ以上に勉強が楽しいみたい。大人になったら学校の先生になりたいって言っていた。うん、いろんなことを経験した君は、きっと子供たちにいろんなことを教えられる。心と体に傷を負ったメルシィ君、なぜそうなったかということ、たくさんの子供たちに伝えてほしい。そして同じような思いをする子供が増えないよう、世の平和を願う子供が育っていきますように。メルシィ君、あなたに期待しているよ。

【死刑について。】

サリン事件を起こしたオウム真理教の幹部たちが、この間死刑になった。13人の死刑囚が一気に処刑されるという前代未聞の死刑執行だったと、そのことはルワンダでもニュースになり、話題となった。多少間違っただけで報道された部分はあったが（処刑の方法が「首を切って死刑になった」と報道した機関もあった）、彼らの関心をひきつけた。

ルワンダは2007年に死刑が廃止された。大虐殺のあった国で、あちこちに恨みつらみ、憎しみがまだ残っているはずなのに、死刑は廃止された。それはルワンダの、国としての大きな決心であったと思う。

オウムの死刑囚が処刑されたというニュースを聞いて、思い出したことがある。

私は過去、ルワンダで行われた公開処刑に行ったことがある。虐殺に関与した人間を処刑するための公開処刑であった。

キガリ市中心から少し離れたスタジアム。その横の空き地でそれは行われた。その日、そこに集まってきた人たちはどこか高揚していたように思う。静かなのだが、頭の中が興奮しているような、妙な高揚感だった。私もその一人だった。公開処刑の様子を大っぴらにしたいくないという思いなのか、その場に行く前にボディチェックがあり、カメラや携帯電話など、記録を残せそうなものは持ち込み禁止となっていた。

どのくらい的人数が集まっていたのか、かなりの人たちである。それは殺した側と殺された側、両方の人たちが混ざり合っていて、それぞれの思いをもってその場に集まってきた人たちだ。

中央に太い木が確か4本、地面に打ち込まれていた。つまりそこに処刑される人をくくりつけるための木である。

しばらくして車に乗せられた死刑囚が連れられてきた。彼らは目隠しはされていなかった。自分の目の前に集まった群衆を見て、一体何を感じているんだろうと考えた。その群衆の中には怒り、悲しみ、同情、憎しみ、いろんな感情があったはずだ。

囚人服を着た彼らは、その丸太に縛り付けられた。そして胸のところに丸いマークのついた布をまといわれ、そのまま群衆の目にさらされた。そしてやっと目隠しをされた。

かなりの時間が経ってからのことだ。一台の車が猛スピードで入ってきて、中から銃を持った兵隊が出て来たかと思うと、その胸の丸いマークを目指して一気に弾丸を打ち込んだのだ。

一瞬の出来事だった。誰もがあっけにとられ、それでおしまい。

でもみんな興奮している。そこにどこのメディアかは覚えていないが日本のジャーナリストが来ていて、回りの人にインタビューを始めてしまった。そのことが興奮した彼らの神経を刺激した。興奮した大勢の人間ほど怖いものはない。殴り掛かりそうになっている。そこにいたガテラが回りの人間をなだめて、その場はしのげたが、こうしてリンチは起きるのである。



虐殺が終わって20年目の時の様子。子供たちが平和を祈る歌を歌っていた。ルワンダの明日を支えるのは彼ら。この子供たちが愛に包まれて生きていけますように。

それ以来、ルワンダでは公開処刑というものはされていない。そして10年近く経って、死刑が廃止された。

罪を犯した人間を裁くために死刑はあるべきだという意見と、廃止にするべきだという意見があるけれど、私はわからない。自分がどちらを支持するのか。

殺人事件の遺族として生きたこともないし、罪を犯して死刑囚になったこともない私は、簡単にどうするべきだと言うことができない。

ルワンダは、右を向いても、左を向いても、虐殺の傷跡が残っており、人はそれと向かい合いながら生きている。何年経とうと、その事実が消えることはない。すべての人が苦しみ、もがいていて、そんな彼らが出した答えが死刑を廃止するという結論だった。

自分自身の答えは出せないままだけど、ルワンダの国が出したこの結論を、私は尊重したいと思う。世の中の狂気を見てしまった彼らだからこそ出せた結論。それを尊重せずして、ここにいる資格はないように思うのだ。だが、もし自分が殺された人の遺族だったら…と、堂々巡りは終わらない。そんな外国人を横目に、ルワンダの人たちは今もいろんなことと戦いながら、国を作っているのである。



雑文もろもろ

相変わらず、年々日本を思う時間が増えていっている。そういう時は大抵、自分が精神的にめげているときだ。

そんな時、どんなふうに日本を思うか。それが私の場合、主に日本の歌なのです。いわゆる青春時代、私は洋楽にはまりまくっていたのだけど、50を過ぎてからは日本の曲にノスタルジーを感じるのである。

例えば美空ひばり。日本にいる時は、彼女の曲を熱心に聞いたことなどないのだが、はっと気が付くと、涙を流しながら「あ〜あ〜、川の流れるように〜♪」と歌っているのだ。そして今も輝き続けているサザンオールスターズの曲なのである。同じ茅ヶ崎出身ということで、勝手に近いものを感じている私。

桑田さんの歌い方は、昭和生まれの私には聞き取れないフレーズも多く（桑田さんも昭和生まれだが）、その都度歌詞カードを見て、内容を確認するのだが、彼の才能はなぜにいつまで経っても枯れないのであろうか。切ない愛の歌とか、あるいは嫌らしいまでの男女のもつれ、そして人を思う優しい気持ちや、おかしい方向に向かっている世界の風刺など、どれをとっても天才レベルの言葉の選び方だと思う。一時彼は反日だとバッシングを受けたが、なんのなんの。これからも世の中のことを歌い続けると宣言したところは、さすが！と思うのである。

ルワンダに来てから、かなり長いこと音楽を聴かない時期があった。聞きたくなかったというわけではなく、聞いている心のゆとりがなかったという理由なのだが、再び音楽を聞き始め、昔好きだった洋楽を聞きながら、最終的に自分が穏やかになれるのは日本の曲やクラシックだった。気が付くと口にしていくフレーズは日本の曲なのだ。どうも私は今、心が弱くなっているらしい。日本の文化や習慣、食生活も含め、そんなものを求めてしまっている。これが年を取るといことなのだろうか？演歌などを聞いてしまった日にゃあ、涙が出てきて、仕事ができなくなっちゃうのだ。赤道直下のルワンダの空を仰ぎながら、「へいへいほ〜」と与作を歌うのも良いではないか。そしてそんな自分も私なのだと最近で思っていました。

【ご寄付ありがとうございました】

ワンラブ通信63号をお送りしてから今までのご寄付は以下のとおりでした（5〜10月）

5月	153,542円
6月	490,000円
7月	276,500円
8月	153,000円
9月	110,000円
10月	78,000円

このおかげで次の製品を配布することができました。

義足	22本
装具	9本
杖	38本
車いす	3台

【ご協力ありがとうございました】

前号で洪水支援のお願いをさせていただきましたが、たくさんの方がご協力くださいました。

ここで改めてお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。合計 3,339,931 円ものご協力をいただきました。

本文中にも書きましたが、完全とは言えないまでも、できる限りの処置はしたつもりです。皆さまのご協力がなければ、雨が降るたびに不安に襲われ、障害者を支援するどころではなかったと思います。

私たちのワンラブブランドは、まったくの手作りでありまして、歪んでいるところや、頭を傾けないと床と平行にならない天井などもあります。直角線も危ういです。

どうやらルワンダの人たちは、日本人ほど平行とか垂直にこだわらず、ガテラのコラムの引用ではありませんが、性に対しては厳粛でありますものの、これら平行や垂直に関しては大変おらかなのであります。

そんな状態に慣れてしまった私は、ほとんど気にならないのですが、日本から来たお客さまたちは、どうにも斜めになっている壁とかを見て、気持ちの悪いものを感じる人もいます。

でも私たちにとっては愛すべきワンラブの建物たち。そんなひん曲がった状態のものであっても、一人一人の汗と涙が混じっているのです。

洪水の修理で、セメントで固められた床は、相変わらず平らではありませんが、それも愛嬌というもの。

日本人、ルワンダの人、両方に助けられながら、今回も立ち直ることができました。

このまま無事に日々を過ごせるかどうか、それはわかりません。自然の力には抗えませんか。

でもどうぞ皆さま、これからも私たちのことを見守っててください。皆さまの愛に支えられながら、できる限りのことを続けていきたいと思ひます。よっしゃ〜！

（尚、集まったご協力が残っている分は、引き続きの工事資金、または義肢製作活動に使わせていただきます。）

【お願い】

ワンラブ日本事務所は、皆さまのご意見等を積極的に取り入れていきたいと思っています。ルワンダ・ブルンジについて知りたいこと、ワンラブに対するご意見等、どしどしお寄せ下さい。

通信発行のお手伝い、イベントのお手伝いなど、相変わらずボランティアも募集しております。またルワンダで中長期のお手伝いをお願いできる方、ぜひご連絡ください。

【おことわり】

* 発送作業の都合上、振込用紙を同封させて頂いておりますが、すべての方に寄付金・会費を催促するものではありません。

* 当団体はご提供いただいた個人情報について、皆さまからご同意を頂いた場合や、正当な理由がある場合を除き、第三者に公開、提供することはありません。

書き損じハガキ、テレホンカードは下記、茅ヶ崎事務所までお送りください。ご寄付は下記の口座まで、みなさまのご支援お待ちしております。

※事務の簡素化と経費節約のため、領収書は省略させて頂いております。

必要な場合は、振込用紙の通信欄に「要領収書」とご記入ください。

〒253-0051 茅ヶ崎市若松町 12-28-304 TEL: 080-6564-4448

info@onelove-project.info(日本事務所) onelove@rwanda1.rw(ルワンダ事務所)

郵便振替口座：00210-5-66497

ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

ワンラブ通信64号 2018年12月

発行：ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

<http://www.onelove-project.info/>

<http://oneloverwanda.blog105.fc2.com/>

<http://www.onelove-project.org/>



One Love
Mulindi Japan One Love Project